

ホープ賞

「情報提供活動を通じ地域医療に貢献できたこと」

尾崎学(中外製薬株式会社 オンコロジー第五ブロック 広島がん専門第四室)

4年間のMR経験の中でMRになって良かったと思うこと、それは自分の情報提供や治療の提案が、医師や患者さんに貢献出来たことだ。4年間の間に、貢献出来たと思えることを数多く経験することが出来たと思う。情報提供が医師や患者さんに貢献出来たという経験は、全てのMRが経験していることだと思う。更に医師や患者さんに感謝をされれば、MRにとってこの上ない経験である。ただ、私にとっては単に地域医療に貢献出来たという喜びだけでなく、MRとしての私の存在意義を実感する体験ができたことにある。その背景と具体的な事例を述べる。

現在私がMR活動をしている地域は小さい市で、高齢者が多く、人口も年々減少している地域だ。交通の便も悪く、専門医のいる病院へ通院することが困難であるため、地元で治療したいという患者さんが多い。だが、病院の勤務医も年々減少しつつあるため、医師も専門でない疾患を診療しなくてはならない状況なのだ。例えば「癌」の中でも、胃癌や大腸癌といった消化器に発症する「消化器癌」と、乳腺に発症する「乳癌」では専門が異なる。だが、医師が少なく、専門医がいないこの地域の病院では、消化器専門の外科医がこの「乳癌」を診療しなくてはならないという現状だった。

ある消化器外科医の先生と面会した際、手術不可能な進行乳癌の患者さんを診療していることを教えて頂いた。その先生にとっては専門外の疾患だ。私は、患者さんの容態、考えられている治療指針を伺った。その治療指針は標準的な化学療法であったが、ガイドラインに追加された新しい抗がん剤が入っていなかった。先生から特に相談を受けたわけではなかったが、私は新しい抗がん剤について詳しい情報を提供し、適切と考えた化学療法を提案させて頂いた。後日、その患者さんの容態について伺ったところ、提案した化学療法は癌に奏功し縮小したが、完全には縮小させることは出来なかったとのことだった。今後の治療指針はとりあえず手術で癌を取り除くことにしたと教えて頂いた。完全に癌を縮小出来なかったことに対し、先生は残念そうにされていた。

この治療効果は残念な結果であるだろうか。手術が出来ず悩んでいたのに、癌が縮小し手術が可能になったのである。手術可能ということは根治も望めるようになったということ、これは患者さんにとって大きな利益ではないだろうか。私はその事を整理して先生に

説明した。すると、先生はこの治療効果の大きさに気付き、治療が成功したと喜ばれた。私にとっても嬉しいことであり、一緒に喜んだことをよく覚えている。その患者さんは、遠方のご家族が住まれている地区の病院にて無事手術を済まされた後、先生の元に戻られ術後補助療法を受けられている。再発も無くお元気だとのことである。

このことでまず嬉しかったのは、自分の情報提供が患者さんの治療に大きく貢献出来たことである。そしてその後、この抗がん剤について先生よりしばしばお問い合わせを頂くようになり、乳癌の患者さんの治療にお役立て頂いている。つまり、この地域の乳癌治療に大きく貢献出来たのだ。

このような地域の医師は、専門外の疾患の患者さんも数多く診療している。そんな状況の中、専門外疾患も含めた最新の医療情報を医師自身で収集し、選別し、診療に活かす事は困難なことに違いない。そこには、MRの存在が絶対に必要なのだと思う。MRは、求められる情報だけでなく、必要ではないかと思われる情報も、適切なタイミング、適切な形で提供することが出来る存在だ。現在、インターネットなどを利用することで莫大な量の情報を得ることが出来るが、あくまで開示しているだけのため、適切な情報提供能力は無い。MRでしか出来ない情報提供が必要なのだ。

こういった地域では、最先端医療やチーム医療への取り組みもこれからであり、私はMRとして当たり前の情報提供をしているだけである。だが、このような経験を通じて、その情報提供活動が地域医療にとって非常に重要であることを実感している。そのような重要な存在意義を持っているMRという職に就くことが出来たことを嬉しく思う。